

新板

以新板改字板

續曲

續入
下

33

252





正徳元号に種々此後あり男其物語云く信房は二字氏男女後なく
 業平持成はせにたりて無官におひあるとも思ふはこれ間題なりと
 するひ書きと没ぼし信房中より亭子院になかあるひ年十三
 幼みらく書きそのあふ作老にあちせていせのころこのおわり
 するひつづる書作る事うづひあそのあに我身むすところなりといわさ
 ゐれどひえなるをうづらひせいで早下れとせり
 おつても古流より南流より南信房ハ七条辰の女房よりならぬ被服よ書てめて
 まる作物語にも中にそのひれ身と改まりたる事と書又万葉集に下れおまへ
 このれと書きとするひけりよりいふ事多し出所ありあがりともなり
 げ物語の中よりひれ代のる書也とのあふ元祖の娘より改定されざるものとせ
 きの方でと思ひたりは云ふた書とてなり
 するひの年天智元年孫あつ阿保親王に父男一人皇太子三代淳和天皇天皇長
 二年四月一日壬午乃ちあつとせり
 一元服ハ 孝和代に明天皇承和七年三月十日十六日
 一逝去ハ 孝和代陽成院元慶四年五月廿八日十六日

元服ハ
一逝去ハ
今皇代仁明天皇承和七年三月十日ナメ
入十七代陽成院元慶四年五月廿八日メナメ

又十七代陽成院元慶四年五月廿八日又十六代

[illegible][illegible]

四
ひんぐ
女メ代トるル

ふれひやうしゐのうふよ

ふはるのうら

底の化をうりあそ

子ておる

今更にちのまを

わねいもづもづてい

子母の心はなほ

[illegible]

ふちまうてゐた

○あつてよんでとゑふア

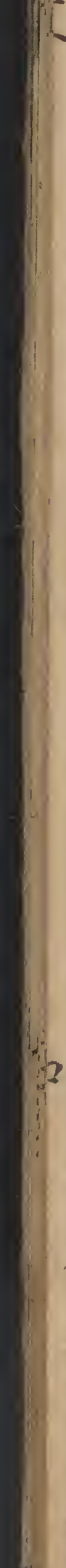
辰
志のぞ

○あやえで

[illegible]

[The page contains faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side.]

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and faint smudges. A decorative, dark, wavy border runs vertically along the right edge of the page. The top edge of the page is slightly irregular, suggesting it might be part of a bound volume.



十四
女は、
さういふ
やうな
おんな
を、
さういふ
やうな
おんな

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

年次書原ごのまゝ人の機ろ盛よえはあらねば



人々を以て

お年やうひも。人の子どもやうにぞ。

け女いよ。げらびしてうらまがわく
風吹かき川白波うつこねをあらや表ひらの境
とよもさるそとみそがさうねりありこひながらす

[illegible]

男がその中に居たり。男文づゝに依て。刑。お

[illegible]

接ちまゐるまゝに
おひていさん
うぐれど女

わづきさひきどひきど若かりるをたまたみおぼ
とひきれど男うけにきり女うけにきりまた
らそとひゆげえとひつでほものありおにうま

くさくさうきふくはびのちてこいほまを

わひつづてもあらんとぞあらはれぬかた

と。そそそに。うづに。うりに。きり
 廿五
 ひ。男ありきり。わづき。い。けり。女。の。え。き。

廿四
三ノ月

平三郎もろ

みまはれやうけんくさふたあてりあふさふさ



廿八 只好之形女

廿九
去文の女御

三十
子
子
子
女

三十一
文のしら

乙卯のころ

我のてしめたるがのちぞもぬむなり

三十八
 ちにてはひり紐とひらてあひみうとひらひらで
 ひり紐とあひりひらひらとあひみうとひらひら
 ひらひらとあひりひらひらとあひみうとひらひら

孝より愛より世にかなむや之を冠

五

九
 十
 子世の人毎は心とも言ふべき事あり

廿九

若花院のみづういよとてみえきなりけり
うみはなるといふもぞかりきりこみこし
てあらんぞこれおぞめ文のきなりけり
ふりきりて女車にあひのつておとまりけり



三十三
ひだろれちり
糸糸糸ううのちり
○オオベーりちりちり
きんぐの区ちりてそれ
やねじやあうれぐも
あしおんくとあそねど
りあそそそそ
○こりえよあそと

あやうき人あつてお供が
三十四つをえたいらひな
いんちをねだるねだる
いひまじりなうてさうだ
むひめは物さへ
○あつてあつてつぎうて
さうやうに

三十五 玉のどちありとてい
わつていふさうとていふ
さうなでけりしものぞい
ふよりいふにぞいふくさ
ふみあられん

三十六 三ノ目

なみまぐさくちのちあゆ
いふくちくち

我々のぐんは英米が
勝つてくちにはさうい
わぬ女をれぐうそこ
ううりして—そのと
我々もむまびくうハあ
ゆぐへひりていさあ
ううい勝つてくちあ
三十八 紀まきぐりう

ありひありのまゝと
 けし。ありさしてとく
 なるにふきあふくへ行く
 とくぬく。まゝより
 ちひさひぬ。——まゝと
 ようそく知てちひさひより
 世中のふかふたよりとま
 とくまゝとく。まゝとく
 世のふかふたよりとま

[illegible]

三十九 さい院のみどし清和
太師の夢あはれなうりしときみ
と弟和子六年ぬ月すゑに
せまうりしときよりあは
れなりしときよりあはれなり
なりなりなり

今何事なりぞやあはれはらへあはれや
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

若^しに男^こきう^うおぬ女^めはひ^ひきう^うらと

ふあやありて。さひりぞつと。げ女とありとひん
と。さうそつと。ひやう人のあらねば。さう

それいふゆゑに、さういふことをしなさいと云ふ

いふは、まゝふちやいせとて、いふは、男は、
せだ。ふひうよは。おてせとて、いふは、男は、
せだ。ふひうよは。おてせとて、いふは、男は、

先づも張別の方へお返しにあらう

ふうそ。あつりなきやあつてまゐる。と云々

そりだつてもあつちよ。まんぢうまた

えんふたじまひくねをきりきふのりちひ

ついで又乃月ぬる時よりなをじて

いしをたきつゝ人のかたきの子抱ひて人

卷之四十一

著女がよみぬ公の心はよみぬ
 ぞきふりておのれをよみぬ

いさひにふくまふとてふらん

あつたてふ

[illegible]

四十四
 いちりあかりにきこれをさふれむに祇に里に海に波に
 音あそふ人よ。きこれをさふれむに。きこれ
 人あそふ人よ。きこれをさふれむに。きこれ
 人あそふ人よ。きこれをさふれむに。きこれ
 のうよ。ゆひつげき

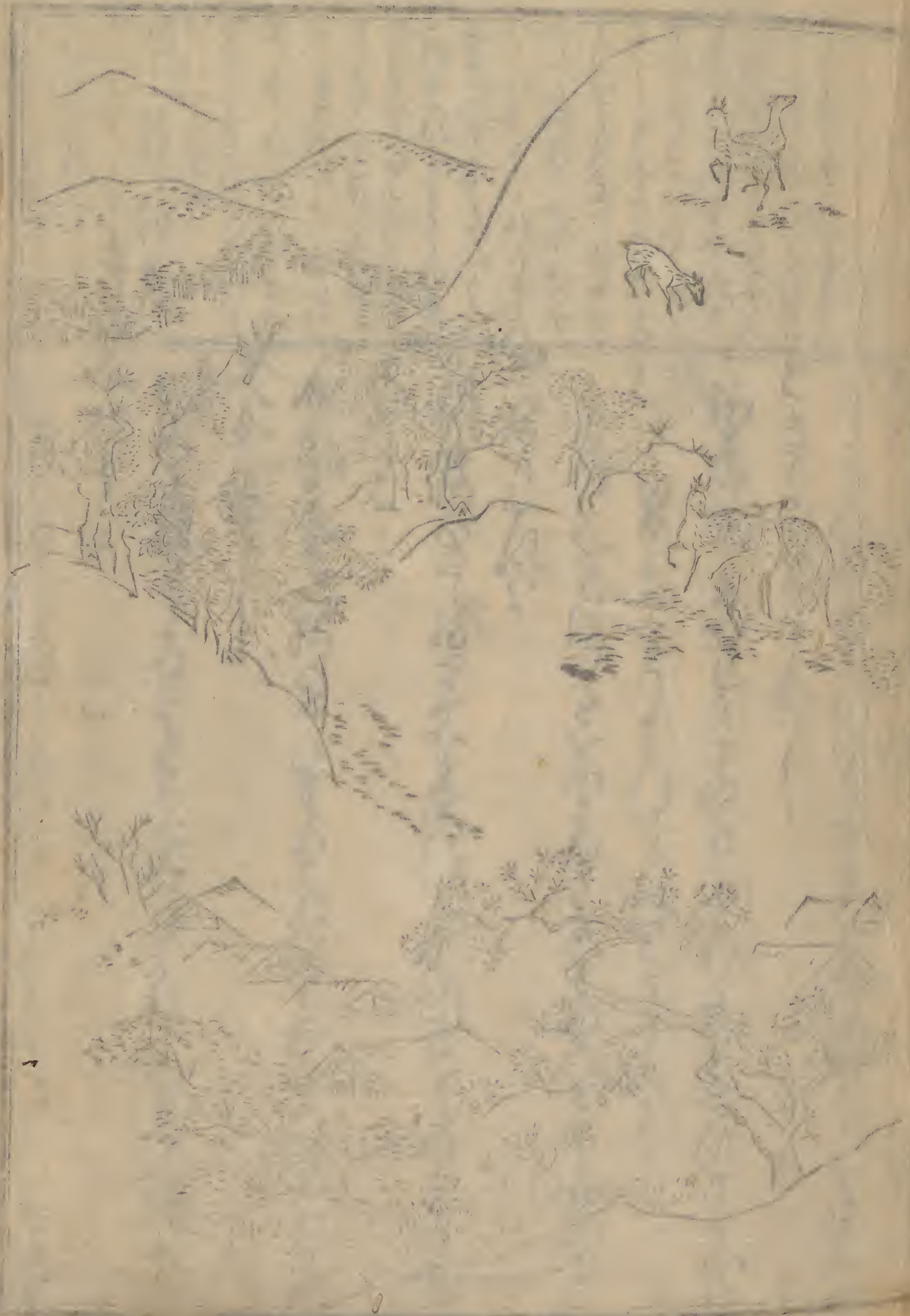
四十四 あづみゆふへりくこ
も常ぐさの。○まに人か
るりの。なを常ぐさうんば
うに人よりわめし。○さき
に秋つ月とまろ。○さきぞ
雲うさぬやれりの。おり
るひんれやき。○ちせり
あざむらわしく。出て行
くの。なを常ぐさうんば
また。あきくさうひうく成
はることもかぶひの。あ
襲の字。く。なを常ぐさ

[illegible]

下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十五 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十六 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十七 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十八 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十九 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 五十 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく

く。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十六 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十七 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十八 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十九 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 五十 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく

下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十六 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十七 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十八 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 四十九 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく
 五十 一。うにあらうひく
 下り。うにあらうひく
 るのれ。うにあらうひく



[illegible]

苦男いもうらのいれりけりきつとんやりと
 ううみ孫はぎにゆるき多と人の法づんともぞふ
 ともてえんわりあり

初多岐のどろびきとあなぞうねりとおひくふ
 じう男をさうりうひう人とうみ

鳥乃とて飛つては空をぬぎやうぬくとあつたは
とつちをぬぐ

初落へき子とてはあづきし世とあるべし
又かこ

吹風よぞれ拂いらばあなをわさくのまゝ
又女五

清水は救くよるもさるに念ふぬ人ともなり
 又れとこ

物とて心よりひよな花とぞまてふとてを

わづらひてさうなにもう男女の思ひありさうなにも
 九十一 若田方人のお裁は菊うきむるに
 御うの秋るに時やうづらん花をさしめ秋ふれあ
 九十二 若田方るさうくの将たるなざり標とせさうさう
 わやめりり花ぬきあそむひさう秋の秋にせえう
 九十三 うきさうぶとさうんやりさう
 若田方わびさうに女はさうく物作さうは秋はさう
 九十四 いさうさうはさうん人志はさうはさうさうはさうに
 九十五 じう男の事さうりさう女はさうひさうさう
 九十六 若田方さうひさう女はさうさうさうさうさう
 九十七 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 九十八 じう男さうさうひさうさうさうさうさうさう
 九十九

の女をうゑしむるのよし

世にふりてなるは男公女公

六十三
世に於ては

[illegible]

[illegible]

A black and white woodblock print illustration from a Japanese book. The scene is set on a raised wooden veranda (engawa) with a lattice railing. In the foreground, a woman in a patterned kimono is seated, looking down. In the background, a man in a kimono and a tall black topknot (chonmage) is seated, looking up. The background shows a stylized landscape with pine trees and a building.

[illegible][illegible]

[illegible]

かしこくしるのまのこまはさうなりつひひあてまつて
 おひきまひのしをれづらつあひまをえぞあ
 けづとられ國へさるんをれど男は金まづ
 られ調とあぞとえあつて花さつあけんと
 とは程に女さうつとさうつとれはあてえ
 ありさうてふまづ
 からくのまれぬえさうあま
 とつてとえさうそのまのうにさうれ
 とえさう。あれとえさうさう
 まふあさのまにさうさう
 とて。あまはさうれあひまをえさう
 尾乃西村。文徳天皇れひひとあれさう
 昔男かりつひひさうさうさう
 ちやうて。さうのまれさうさうひひさう

月のうらやまあはれ
うらやまあはれ
うらやまあはれ

七十四 月のうらやまあはれ
うらやまあはれ
うらやまあはれ

七十五 月のうらやまあはれ
うらやまあはれ
うらやまあはれ

七十六 月のうらやまあはれ
うらやまあはれ
うらやまあはれ

七十五 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

七十六 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

七十七 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

七十八 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

七十九 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

八十 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

八十一 男は現れあはれ
大はれはあはれ
大はれはあはれ

七十九 うちの中へ
ありつゝうとひのひすう
のうにさえずあんま
せんうよりい。あわぢ
ごい。さぶずのそふり
めめいられもあわぢ
うりあわぢはゆき
。御門ハ後二門ともあり
。うちちあつげれ交際
いのうちちり城あ
めりし作内門や
たぐりしだりの

[illegible]

の藤より家内がで違ふよりうゝさかみ讀む
 八十二
 若くは死んて戸を人にあけさせり。山ざにの
 わるゝ。あゝ家と云ふは文わむる。あゝ毎日の花

八十五

70

八十

今

子

10

今

子

下

子

子

八

五

[illegible]

伊首之魂



九十二 昔もなほしやねいそ夜はなほあふくさるゝ

若男郎のちやうどいふ人なほひけたり
さういふあひだもやあふくさるゝ

あふくさるゝいふ人なほひけたり
しやねいそ夜はなほあふくさるゝ

九十四 昔もなほしやねいそ夜はなほあふくさるゝ

若男郎のちやうどいふ人なほひけたり
さういふあひだもやあふくさるゝ

あふくさるゝいふ人なほひけたり
しやねいそ夜はなほあふくさるゝ

九十四 昔もなほしやねいそ夜はなほあふくさるゝ

九十四 昔もなほしやねいそ夜はなほあふくさるゝ

秋の夜更けに
 女の人を待つ男
 の心はさうさうに
 いふまで一日二日
 づき。そのうち
 秋の夜更けに
 女の人を待つ男
 の心はさうさうに
 いふまで一日二日
 づき。そのうち

秋の夜更けに
 女の人を待つ男
 の心はさうさうに
 いふまで一日二日
 づき。そのうち
 秋の夜更けに
 女の人を待つ男
 の心はさうさうに
 いふまで一日二日
 づき。そのうち

秋の夜更けに
 女の人を待つ男
 の心はさうさうに
 いふまで一日二日
 づき。そのうち
 秋の夜更けに
 女の人を待つ男
 の心はさうさうに
 いふまで一日二日
 づき。そのうち



九十七 川のありか
ちごふ 衣たはき
の四千 衣たはき
うひ 衣たはき
衣たはき

[illegible]

九千八百
りてゐる。上段の字は、
のまゝに。ほゞ、まづ男
うひひうひ・うひひひ
系があらわく作名で
うひひひ月梅のまへ
と、は、わかれだ。

[illegible]

九十九 ちをのる傷のひ
とりの日 ひう 丑月
ちをのる傷めくちを傷
めさねのさうに 衆人
禍をひさとりてさうめ
ひかりと云くちをのる
傷にふさうちをのる言ふ
まじと云や。女ありあり

まづわたり　車の下より
女のふも通なり　乃て衣に
女されしを　中より
より男　なつひより
みだりわすれしもの
うづみきなり　ちねん
そのこととぞ　まれなるや

うきや酒をまんこ
わきまひくくあそ
ぶし。あそびぬま
ちよもふべしうは
りへるぢかてあひ

[illegible]

九十七
若狭川のちりばちりぎとていふそりもろ字
のや久九条乃ちめてせられゆく月中のそりなる

九十八
若かりにわりのふとたぐもさるちわりたり候てふ

男。五月に梅枝の枝よふとふとふとて
 我のひき馬をたふす時りまぬぬあそふとて
 とうんとふとふとふとふとふとふと
 てふとふとふとふとふとふと

昔をとりて傷をひきとりけり。ひひよなありき
 車に女のおの下をされり。女の心をきれり
 中をとりて男をよそへて居りきり

るふあひみずもぬへのほくらあわらきや通せん

あつた河をわたりてふたひのころにあらた
つたれり
る男は涼風のそよぐとさうされいあつた

[illegible]

百八 けいふのうらやまを
 風流なふはなをきくも我をばれりてんを
 ちひれもまたひきつるはうとひりつ男
 百九 若男なごられんもうらやまをわつひり
 花よりも今そあまたぬはまれし事とてはなは
 百十 若男もそたかふあつたりぞれうらやまひ
 若男もらんあひつるもれは男
 百十一 ちひあまのうらやまのうらやまをわつひり
 若男もわつひるはなをきくも我をばれりてんを
 ちひれもまたひきつるはうとひりつ男
 百十二 若男なごられんもうらやまをわつひり
 花よりも今そあまたぬはまれし事とてはなは
 百十三 若男もそたかふあつたりぞれうらやまひ
 若男もらんあひつるもれは男
 百十四 ちひあまのうらやまのうらやまをわつひり
 若男もわつひるはなをきくも我をばれりてんを
 ちひれもまたひきつるはうとひりつ男
 百十五 若男なごられんもうらやまをわつひり
 花よりも今そあまたぬはまれし事とてはなは
 百十六 若男もそたかふあつたりぞれうらやまひ
 若男もらんあひつるもれは男
 百十七 ちひあまのうらやまのうらやまをわつひり
 若男もわつひるはなをきくも我をばれりてんを
 ちひれもまたひきつるはうとひりつ男
 百十八 若男なごられんもうらやまをわつひり
 花よりも今そあまたぬはまれし事とてはなは
 百十九 若男もそたかふあつたりぞれうらやまひ
 若男もらんあひつるもれは男
 百二十 ちひあまのうらやまのうらやまをわつひり
 若男もわつひるはなをきくも我をばれりてんを
 ちひれもまたひきつるはうとひりつ男

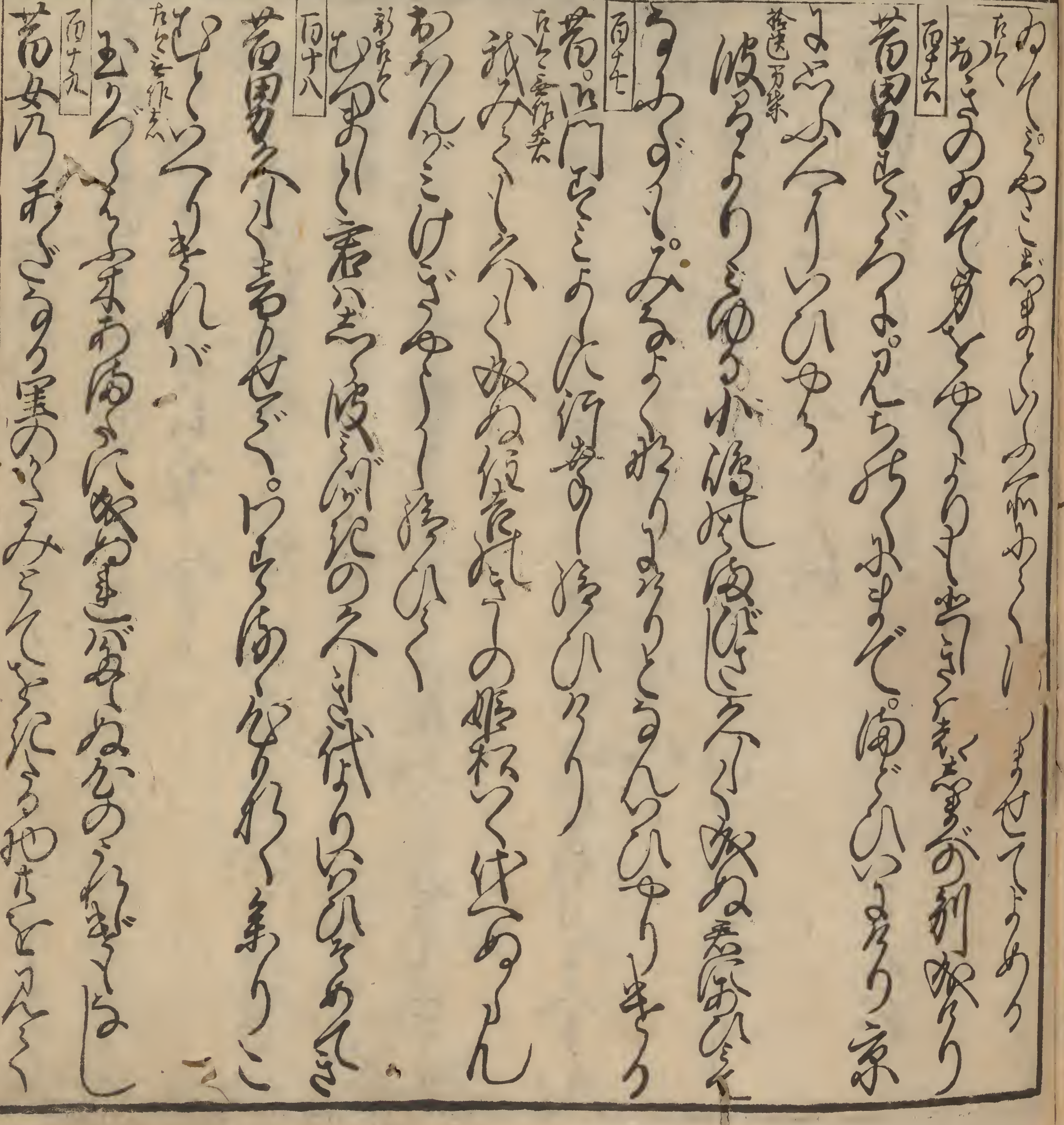
[illegible]

[illegible]

百十五 ちさのめやうと書
奥列のちさのめやうと書
ちさのめやうと書
ちさのめやうと書
ちさのめやうと書
ちさのめやうと書

序のしえいぬきうた
あひもそわいんとしてよむと
うらうらぬびさーいまた
まゝあともうしぬびさー
ねびさーあでうぶぎどー
おろちやうくぬかりんてん
いのちやりやう　ちりひれカ
とあつはあぐうくぬろうと
なまぢうらいちやうこしあめ
ぬぎどー

百十七 四門徑香に河津
又德天皇天安元年に徑香
より香くあり。新羅より
今く申ふ 智恵はあけ
程あつしつた思ふに中
よりあつたあつた 貴
きうてありつた



ちをいふ
 かていふを今あつての世にしろふ事を時をわかれ
 百廿
 昔男のまがせどとわかれろくのいりた志の
 びくわきこてのらりて
 移す
 わつたるは海風をうせらんする人のうぐれ敷え
 百廿一
 昔男極つてより。ぬえまてのまゝのわきとく
 常は常はつてぬえまてのまゝのわきとく
 ぬえ
 常は常とあつてぬえまてのまゝのわきとく
 百廿二
 昔男らぶらつて。あやまらるゝ
 移す
 山城のおれあつてはあひはひはなれた世なり
 といひやまらるゝ
 百廿三
 昔男のまがせり。あつたにほきりあつた。わくわく
 あやまらるゝわきとく
 年とてはる黒紙わきとく
 海風をわきとく

女

廿二日

七
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

荷男、いふなりきりて云成ひたりとあり

子といふは

若男とてひく心あぐくわねれど

江より乃て分れしきなり

まのうへにありはまゝと

終

百廿二 ちぢれり
 百廿三 ちぢれり
 百廿四 ちぢれり
 百廿五 ちぢれり

戶部尚書 左列

繪師

姜川在焉

公會開板

延寶七歲己三月吉日

